第8回 モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2011年5月8日(日)

◆開演◆ 14:30◆

会場：安曇野市
穂高交流学習センター
「みらい」

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会
共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭
後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会
信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

よこしまかつと

モーツァルトには有名な管楽器のセレナードやデヴェルティメントが数多く残されています。映画「アマデウス」にも使用され、管楽器セレナードの最高峰の「グラン・パルティータ」が、この第8回全曲演奏会でついに登場します。約60分にも及ぶこの大曲の歴史を探ってみましょう。

作曲者自身の声

モーツァルトが他人とは違った自分自身の声を発するようになるのは、ジャンルごとに時期が異なっている。オペラ・セーリアや劇場用セレナータ、オラトリオ、学校劇、さまざまな形の教会音楽といった、劇場の作品の委嘱を受けた作曲家のすることといえば、人々の耳に新しいものを提供するよりは、人々の期待に添うものを書くことであり、これまでにだれも試みたことのないものを探求するよりは、既存のスタイルを使って腕前を見せることであった。だから、モーツァルトがミラノで書いたオペラや、ザルツブルグで書いた教会音楽には、スタイルの独創性とか作曲家独自の声といったものはまだ姿を見せていない。しかしモーツァルトの独特のスタイルが初めて完全に実現されたグループが1772年から76年にかけて作られたザルツブルグ時代のセレナード、ディヴェルティメント（第7回全曲演奏会にNr4を演奏）、ヴァイオリン協奏曲（第3回、第7回全曲演奏会にそれぞれ第1番、第2番を演奏）にははっきりと見られる。

【夜想曲】

セレナードとはこの頃は多楽章形式を指すようになっていたが、もともとは男が恋人のために戸外で歌ったもので、音楽による愛の贈物のことであった。モーツァルトのオペラの中にはこの元の意味に沿ったアリアがいくつかあり、多くはギターやマンドリンを模倣した伴奏がついている。それらは《ドン・ジョバンニ》や《フィガロの結婚》などに見られる。こうした元の意味をかならずしも全部失うことなく、それらをアンダンテやアダージョの楽章に取り込みながら、セレナードという言葉は役割を拡大して多楽章形式の器楽曲となり、結婚式、婚約、昇進、栄転、卒業などのお祝いの機会の音楽の贈り物となった。

セレナードのスタイルの上でのもっとも顕著な特徴は、牧歌的だということであり、モーツァルトのセレナードを見ると、標準的な牧歌的な題材の範囲の中で無数の素材を見つけてくる才能を彼が持っていたことがわかる。自然の音を連想させる効果、民謡の引用、角笛やバグパイプの音、ギターや管楽器の音の真似、狩を思わせる楽想、それらとともにたくさんのダンス音楽があらわれる――ミュゼット、ガヴォット、シチリアーノ、コントルダンス、ジク、レントラーらで、それらは牧歌的な世界と強く結びついている。

ハルモニームジークと複数の管楽器

アンサンブルには同族楽器によるもの、あるいはまったく異種の楽器によるものなど、多くの試みがなされてきた。なかには、この上なく美しく調和するがコントラストに欠ける組み合わせもあれば、

反面コントラストには富むが、あまり調和しない組み合わせもある。そのなかで、古典派の作曲家がもっとも理想にかなうアンサンブルと考えたのが、ハルモニームジークである。これは1組のホルンを核として、ファゴットがバス声部を担当し、上声部に1組あるいはそれ以上の高音楽器を配するものである。こうしたアンサンブルは野外で効果を発揮し、長いあいだ軍隊で使われていた。広大な邸宅や庭園をもつ貴族もまた、こうしたアンサンブルが自分たちの需要を理想的に満たすものだと考えていたのである。

【ミラノとザルツブルグのハルモニームジーク】

モーツァルトのハルモニームジークは、彼の生涯の3つの局面に沿って分けることができる。最初期のハルモニームジークはKV186やKV166のようなディヴェルティメントのように、モーツァルトがミラノに滞在していた1773年に依頼を受けて作曲されたと思われる。これらの曲は音楽的にはあまり見るべきところがない。しかし1770年代中頃に大司教のためにザルツブルグで書かれた5曲の六重奏ディヴェルティメントでは、モーツァルトの作曲様式の発展が非常に注目される。伝統的な編成によるこれらの作品は、同時代の慣習を超えた卓越さを示しており、だれもがモーツァルトらしいと感じるであろう。

【ウィーンのハルモニームジーク】

ウィーンの音楽活動では、ハルモニームジークは1782年まで、驚くほどわずかな役割しか果たしていなかった。ハルモニームジークは居酒屋や軍隊の音楽であり、宮廷人ではただひとり、シュヴァルツェンベルク候が興味をもっていただけであった。モーツァルトは1781年の終わり頃、皇帝がシュヴァルツェンベルク候の手本にならおうとしていることを聞きつけたと思われる。
モーツァルトはその年の10月に高音楽器にクラリネットを用いた伝統的スタイルの六重奏のハルモニームジーク《セレナード変ホ長調》KV375（第5回全曲演奏会で第2稿を演奏・プログラムノート参照）を書いた。彼は1781年11月3日付けの父親宛の書簡の中で、自分が宮廷での評判を高めようと、いかに細心の注意を払ってその曲を書いたかを語っている。
その手紙をご紹介しよう。

「親愛なるお父さん！　　ウィーン、一七八一年十一月三日
例のカデンツァを受け取ったこと、こないだの手紙でお知らせしなくてごめんなさい。
本当にありがとうございました。――あの日はたまたまぼくの霊名の祝日でした。――朝、祈祷をすませたあと――ちょうど手紙を書こうとしていたら、大勢のお祝いの客が押しかけてきたのです。――正午には馬車で、レーオポルトシュタットのヴァルトシュテッテン男爵夫人のところへ行き――そこでぼくの霊名の祝日を過ごしました。夜の十一時には、ぼくのためにセレナードが演奏されました。二本のクラリネットと二本のホルン、二本のファゴットによる――たしかにぼくの自作の作品です。――この音楽は、ぼくが聖テレジアの日に、フォン・ヒッケル夫人の妹、つまりフォン・ヒッケル（宮廷画家）の義理の妹のために書き、実際にその邸で初演もされました。――それを吹いた六人の楽士たちはみすぼらしいなりをしていましたが、

実に見事なアンサンブルで演奏してくれました。ことに第一クラリネットと二本のホルンは抜群でした。――ぼくがこれを書いた一番の理由は、(毎日そこへやって来る)フォン・シュトラック氏にぼくの作品を何か聴かせたかったからです。そしてぼくもちょっと念入りに書き上げました。――これは大いに拍手喝采を受け――聖テレジアの日の夜に、三箇所で演奏されました。――楽士たちはあるところで演奏を終えるとすぐにどこか別のところへ連れていかれて、またもや稼がせてもらったというわけです。――この連中は玄関の門を開けてもらって、中庭の中央に並び、ちょうどぼくが服を脱ごうとした瞬間に、変ホ長調の最初の和音を奏でて、最高に気分よくぼくを驚かせてくれました。―略― 』

モーツァルトがその創造的な個性を確立したのはセレナードやディヴェルティメント、その他これに関連する作品においてであるが、それらはザルツブルグのパトロンたちや友人たちの注文に基づいて作られた、いわゆる"社交的な"音楽で、作曲家のこの地域社会への結びつきを示すものである。田園的で牧歌的な暮らしと結びついた情緒に対する彼の強い愛着を示したものである。
だが彼のセレナードの概念の中心に牧歌があるとしても、モーツァルトの作り出したセレナードは田園生活を絵画的に描き、静寂、満足、陽気、優雅と言った単純なムードを持った先人たちのセレナードに見られる牧歌とはすでに一線を画している。ギュンター・ハウスヴァルトのすぐれた研究は、モーツァルトがザルツブルグのセレナードのおとなしい、何も問題のない音楽を変容させたことを明らかにしているが、従来の素朴な心理的雰囲気は一変し、曲間のコントラストは強くなり、その表現力は著しく深くなったことが、示されている。

●セレナード　変ロ長調　Serenade in B　KV361(370a)
(25～28歳 1781年、ミュンヘンとウィーン、または1781年から84年 ウィーンで作曲)
Largo－Molto Allegro, Menuetto-Trio Ⅰ/Ⅱ, Adagio, Menuetto(Allegretto-Trio Ⅰ/Ⅱ)
Romance(Adagio-Allegretto), Tema con 6 variazioni(Andante), Finale(Molto Allegro)

モーツァルトのセレナードのほとんどがザルツブルグ時代に、裕福な上流階級や大司教の宮廷の行事のために作曲された。ただこの「セレナード・変ロ長調」は彼が故郷を離れて書いた少数のセレナードの一つである。しばしば《グラン・パルティータ〔大組曲〕》と称されるこのセレナードは、モーツァルトが1780年にミュンヘンに赴いた折、『イドメネオ』KV366の上演後、翌1781年に同地で書きはじめ、そのあとウィーンに移り住んでから完成したものと考えられていた。したがってケッヒェル番号もKV361＝KV^{6} 370aとつけられている。
ところが、近年の研究はこのセレナードについて、およそ次のような確実性の高い推定を打ち出している。この曲は、モーツァルトがウィーンで知りあったシュタードラーに依頼されて作曲し、まさにその シュタードラーの演奏会用(演奏会は1784年3月23日)に書かれたものであり、したがって、作曲は同年2月8日前後に行なわれている。"モーツァルトの自作全作品目録のスタートは2月9日、第一曲目はKV499でこのセレナードは残念ながら書き込まれていない"(第7回全曲演奏会プログラムノート参照) したがってケッヒェル番号によってその位置を示せば彼がバルバラ・プロイヤーのために作った最初のピアノフォルテ用協奏曲KV449の前後であろう。なお《グラン・パルティータ》はモーツァルト自身がつけたタイトルではない。

●交響曲 ト長調　Sinfonie in G　KV74
（14歳　1770年春ごろ・おそらく最初のイタリア旅行中）
＊*Allegro, Andante, Allegro*

KV74の自筆譜には日付もタイトルも記されていない。しかし最終楽章の末尾に「終了、神に感謝」と記入することによって、モーツァルトは完成にあたっての感謝（それとも安堵であろうか?）の意を表わしている。冒頭には誰かがいったん「（オペラ《ミトリダーテ》のための）序曲」と書き入れたが、後に抹消された。モーツァルトがオペラの初演の半年以上も前にその序曲を作曲したとは考えられない。しかし1768年、ウィーンに滞在中にシンフォニーKV45（第10回全曲演奏会で演奏予定）を《ラ・フィンタ・センプリチェ》の序曲とした例があるため、既存のシンフォニーをオペラの序曲として再利用した可能性が、考えられないわけではない。この時期のモーツァルトのオペラ・シンフォニアはトランペットの「公の」調性であるハ長調、ニ長調、あるいは変ホ長調をとるのが慣例であった。また編成は、ほとんどの場合、オーボエとフルート二本ずつであった。したがって、〔調性も編成も異なるこの作品が《ミトリダーテ》の序曲だという〕書き込みは、誤りに違いない。
1970年代初めには、KV74の自筆譜を見ることができなかったため、プラートは、ケッヒェル作品目録にある「おそらく1770年、ミラノで」という説に同意するしかなかった。アラン・タイソンはもう少し幸運で、ヴォルフガングが1770年4月にローマで作曲したアリア《もし、勇気と希望とが》KV82＝73oに使われたのと同じタイプの珍しい紙に、KV74が書かれていることを、数年後に発見した。この情報は作品に理にかなった確実な位置付けを与えるものである。

＊モーツァルトはこの曲の全楽章に速度表示を書いていない

●交響曲 変ホ長調　Sinfonie in Es　KV132
（16歳　1772年7月 ザルツブルグ で作曲）
＊＊ *Allegro, Andante,* Menuetto-Trio, *Allegro*

レーオポルトの筆跡はこのシンフォニーの自筆譜にもはっきり見てとれる。ヴォルフガングが「シンフォニア」とした上に、レーオポルトは「騎士ヴォルフガンゴ・アマデーオ・モーツァルト作／一七七二年七月ザルツブルグにて」と書き加え、さらに第一、第二、第四楽章のテンポ表示を書き加えた。
表示しなかったとはいえ、ヴォルフガングは、これらの楽章の慣習的な性格と機能が、自ずとそれぞれのテンポを表わすと考えていたに違いあるまい。この作品にはもう一つの緩徐楽章がフィナーレの後に綴じられている。なぜ2つの緩徐楽章が残されたのか?
使用目的によって使い分けられていたのだろうか？　疑問が残る。
もう一つホルンの記譜法にも難題を提示している。2組、計4本のホルンのうち、第1ホルン、第2ホルンにEsアルト管が指定されている点である。ところが、18世紀のホルンでは、最高でCアルト管しか現存しない。このことがこの作品の演奏を非常に困難にさせている。いったいモーツァルトは何を考えていたのであろうか。こちらも疑問が大いに残る。

＊＊Menuetto-Trio以外の速度表示は、モーツァルトではなくレーオポルトによるもの

★参考文献　「モーツァルト書簡全集」白水社、「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、
「モーツァルト」メーナード・ソロモン著、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、
「モーツァルトの生涯」海老沢 敏著